

令和6年度（2024 年度）市民による夏季展示

めぐる・かわる・つながる

さがしてみよう！ すいたの四季

7月20日(土)～8月25日(日)



【左上】JR 岸辺駅北口付近 【左下】千里緑地遊歩道（海老池付近） 【右上と右下】佐竹公園付近
撮影と構成：内田陽造

本年の夏季展示のテーマは「さがしてみよう！すいたの四季」です。「めぐる・かわる・つながる」の通しテーマのもとでは4回目となります。

吹田市は宅地開発が進み、自然環境は減少の一途をたどっています。しかしながら、それなりの自然も残っていて、それを保全するたゆまざる努力もはらわれてきました。今年は四季の移り変わりのなかに草木虫魚の変化を追いもとめる展示を構想しています。春は万博公園の梅と桜、秋は三色街道の紅葉といった名所も存在します。市内各地の池や川や公園に行けば、渡り鳥や水辺の生き物にも四季を感じることができます。また千里緑地のヒメボタルや紫金山公園のコバノミツバツツジなど、市民による保護活動も忘れることはできません。

市民実行委員会のメンバーとともに吹田の四季と一緒にさがしてみませんか。本番の展示にご期待ください。

（当館特別館長 中牧弘允）

令和6年度（2024 年度）市民による夏季展示

めぐる・かわる・つながる さがしてみよう！ すいたの四季

「今日は何日だったかな？あの予定は明日で間違いなかったかな…？」ふと、カレンダーを見て「あ、まだ3月のままだ、ちゃんとめくっておかないと…そうか今はもう4月、春なんだ。」

また、こんなことを思う事も多くなりました。「梅雨と言っても最近はあまり雨が降らないな、むかしは毎日毎日雨ばかりだったのに、そのくせ降ったら降ったでまるでスコールのような土砂降り。」「季節も夏から秋にならずにいつまでも猛暑が続いたかと思うと急に冷え込み冬が来る…もう四季なんてなくなって二季になってしまった…」と。

私は何から四季を感じているのだろうか？暦の中には間違いなく四季がある、そして暦が変わり自然が移り、気候が変わる、植物や虫たちが変化し、この花が咲いた、あの蝶が飛んできた。そうして待ち遠しい遅い春や、浮足立つ早い春がめぐるって来るのを感じているのだと思います。そんな風にして、めぐり、かわり、つながっている季節を感じるのだとも。

今年の夏季展示は「さがしてみよう！すいたの四季」です。吹田にはまだまだ大切に守っていかなければならない、季節を感じさせる自然が残っています。

ヒメボタルが舞う緑地もあれば、絶滅が危惧されている希少な植物も残っています。しかし、千里ニュータウンをはじめ市内に外来植物が多く侵入してきています。桜や梅の木

に甚大な被害を及ぼし枯死させるクビアカツヤカミキリの侵入も危惧されています。ヒメボタルの生息する緑地や、希少種の生息地は外来生物の脅威にさらされています。

多様な動植物が暮らしながらも、環境の変化や外来種の影響を大きく受ける生態系の中で私たちは暮らしています。足元の身近な自然を見つめ、生き物の多様性を守り、生態系を守っていくことが、私たちの暮らしを守り豊かにすることにつながります。小さな季節の変化や環境の変化に目を向けてこそ、ゆっくり進み、なかなか気付きにくい生物多様性の喪失や地球規模の環境変化・気候変動という、大きな変化の前触れも見つけることができるのだと思います。

地球温暖化防止はもう待ったなしの状況です。今私たちが対策をとらないともう後戻りができない、変動の転換点にきています。吹田の環境はいまどんな状況なのか、どんな生きものが季節のなかで暮らしているのか。身近な足元の自然の中に四季を探して、ゆっくり長く観察してみたいと思います。

牧野富太郎博士は「綿密に見れば見るほど新事実」という言葉を残しました。小さな花や虫たちと一緒に遊んでみよう。そうすれば、吹田の環境の何が大切、何が起きている、私たちはどうすればいいかがわかるのではないかと思います。

（夏季展示実行委員長 藤田和則）

紫金山公園とコバノミツバツツジ

私はまち歩き用のキャップのひとつにコバノミツバツツジがデザインされたバッチを付けています。表は花と葉、裏は「11 緑の募金 コバノミツバツツジ」と書かれています。「すいた環境学習協会」に所属していた時、募金して頂いたもので今でも大切にしています。



コバノミツバツツジのバッチ

コバノミツバツツジはツツジ科ツツジ属の落葉低木で樹高は3mほど、葉が枝先に3枚輪生状に展開するミツバツツジの一種です。

分布は静岡以西の本州、四国及び九州の山地。関東地方南部から中部地方南部に分布するミツバツツジに比べて、葉が多少小さいため、この名がつけられました。

開花は吹田市では3月下旬から4月中頃まで。他の花木に先駆けて開花し、山一面を紫色に染めて春の訪れを告げます。紫金山の名称も紫色に染まるコバノミツバツツジの群生から付けられたといわれています。

コバノミツバツツジの名勝として名高いのは、重井薬用植物園（岡山県）、善住禅寺（愛知県）、廣田神社（兵庫県）、滋賀県希望が丘文化公園（滋賀県）などです。吹田市の紫金山公園もそのひとつです。また「コバノミツバツツジの郷づくり」（滋賀県）、「ツツジ山再生プロジェクト」（岡山県）などが保全活動をおこなっています。

紫金山公園のコバノミツバツツジの現状はどうでしょうか。

「すいた市民環境会議」が2021年に発行した『レッドリストすいた 2021 ～守りたい吹田のいきものたち～』によれば、「紫金山公園 コバノミツバツツジ群生地」は「レッドリストランク吹田市：A」と記されています。生態系Aは「自然性が高いか人工

的であっても絶滅危惧種を多く含む生態系」と定義されています。選定理由は、「コバノミツバツツジが常緑樹に被陰され、衰弱してきていましたが、植生管理により復活し、今では見事な群落を形成しています。吹田市内ではこの様に群生している場所は他になく、貴重です。また、在来の植物種も多く、市街地であってまとまった緑地を形成しているので重要である」とあります。コバノミツバツツジは絶滅危惧種ではありませんが、群生する紫金山公園の保全・管理の重要性が書かれています。

そして紫金山公園でコバノミツバツツジなどを守ってくれているグループが「紫金山みどりの会」の方々です。

毎月1回程度集まり、コバノミツバツツジを保全するために常緑樹を伐採して林を明る



紫金山公園のコバノミツバツツジ

くしています。明るくなるとネザサが繁茂し、他の植物を駆逐しますので、ネザサを刈って守ります。

この他にも里山景観の保全、散策路の整備、そして最近ではコバノミツバツツジの実数を確認する活動も始めています。

今年の夏季展示のテーマは「さがしてみよう！すいたの四季」です。吹田市民の中に紫金山公園、コバノミツバツツジをまだ知らない方も多いと思います。「紫金山みどりの会」のご協力を得て、吹田の春を代表するコバノミツバツツジとそれを守ってくれている「紫金山みどりの会」の活動を展示と講演会で市民の皆様にお伝えしたいと思っています。（夏季展示実行委員 内田正雄）

「はし」をめくりながら、さがしてみよう！ すいたの四季

「はし」に近づくと見えてくる風景があります。「はし」の向こう側から振り返ると分かることがあります。今回は吹田市域の周縁、境界付近をめくりながら、その季節ならではの景観を、そして人と自然の共生の一端をさがしてみました。

「白鳥橋」からはじめましょう。写真1.の撮影地点は大阪市の北の端、東淀川区井高野。番田水路の向こう側は吹田市南正雀、水路に沿って東（写真右手）に歩くと、すぐに摂津市別府です。写真2.のように、春になると堤防沿いのソメイヨシノが見事な花を咲かせますが、1878年の付け替え工事までは、この辺りで神崎川が安威川に流れ込んでいました。その後、神安土地改良区をはじめ多くの関係者が、長い時間をかけ水路や堤防を整備し人々が暮らせる場所に変えてきました。その歩みを桜並木とともに未来に伝えていきたいものです。



写真1. 白鳥橋



写真2. 番田水路と桜並木

上高浜橋付近で安威川と合流した神崎川は、海を目指して西へ流れます。写真3.は糸田川合流地点にたたずむコサギです。この辺りは神崎川の右岸ですが東淀川区十八条町、糸田川河口に架かる五反田小橋を渡ると吹田市江の木町、右手は南吹田5丁目です。古代の湊津だったこの辺り、地形は変わりましたが、水もきれいになった神崎川の河川敷には、遊歩道「水鳥の道」が整備され、とくに冬場は多くの水鳥を見かけます。糸田川沿いの街路樹や花壇にもいやされます。

高川沿いに吹田市と豊中市との境目を北へ進むと服部緑地の都市緑化植物園、両市にまたがって立地しています。高川沿いには新宮池とうづわ池。まだ1月というのに、池のカワウの頭部は白い婚姻色に。(写真4.) そう

いえば、最近は春半ばなのに夏日が続くなど、吹田でも四季の境目が分からなくなってきました。



写真3. コサギ



写真4. カワウ

桃山東橋までやってきました。この辺りは1953年まで同じ三島郡新田村でしたが、上新田地区は豊中市に、下新田地区は吹田市に編入されましたので、今は両市の境界です。境界も時代とともに変わります。

橋の南側には桃山公園。春日大池へ渡ってくる鳥は減りましたが、ラクウショウの林は健在です。(写真5.) 晩秋に焦げ茶色になった林は、休憩所横の水際に鯉のぼりが飾られる頃には、鮮やかな緑色に変わります。



写真5. 春日大池



写真6. 北千里給水拠点

北の端の街区、青山台にやって来ました。箕面市や豊中市との境目です。かつて峠の茶屋があったと伝わる高台付近に、北千里給水拠点が設けられています。夏空に緑が鮮やかです。(写真6.)

さらに東へ進んで新大正川橋へ。川に隣接した八丁池と周辺は茨木市小坪井。吹田市に囲まれた飛地です。インターチェンジの建設などで池は小さくなりました。新大正川の上流は暗渠となって万博記念公園内の池につながっているとのことです。万博記念公園は半世紀かけて木々が育ち、花が咲き、鳥が舞います。

誌面の都合で駆け足になりました。詳細は

夏季展示会場でご覧いただくとして、最後は「月光橋」、正雀川と山田川をつなぐ水路に架かっています。左側（西）は吹田市山田南、右側（東）は摂津市千里丘、背後は吹田市岸部北です。（写真7.）

東側に広がる市場池オアシス広場でハスの花が開くのは夏の初め。そしてユリカモメがやってくる頃、季節は秋から冬へと移り変わります。（写真8.）



写真7. 月光橋



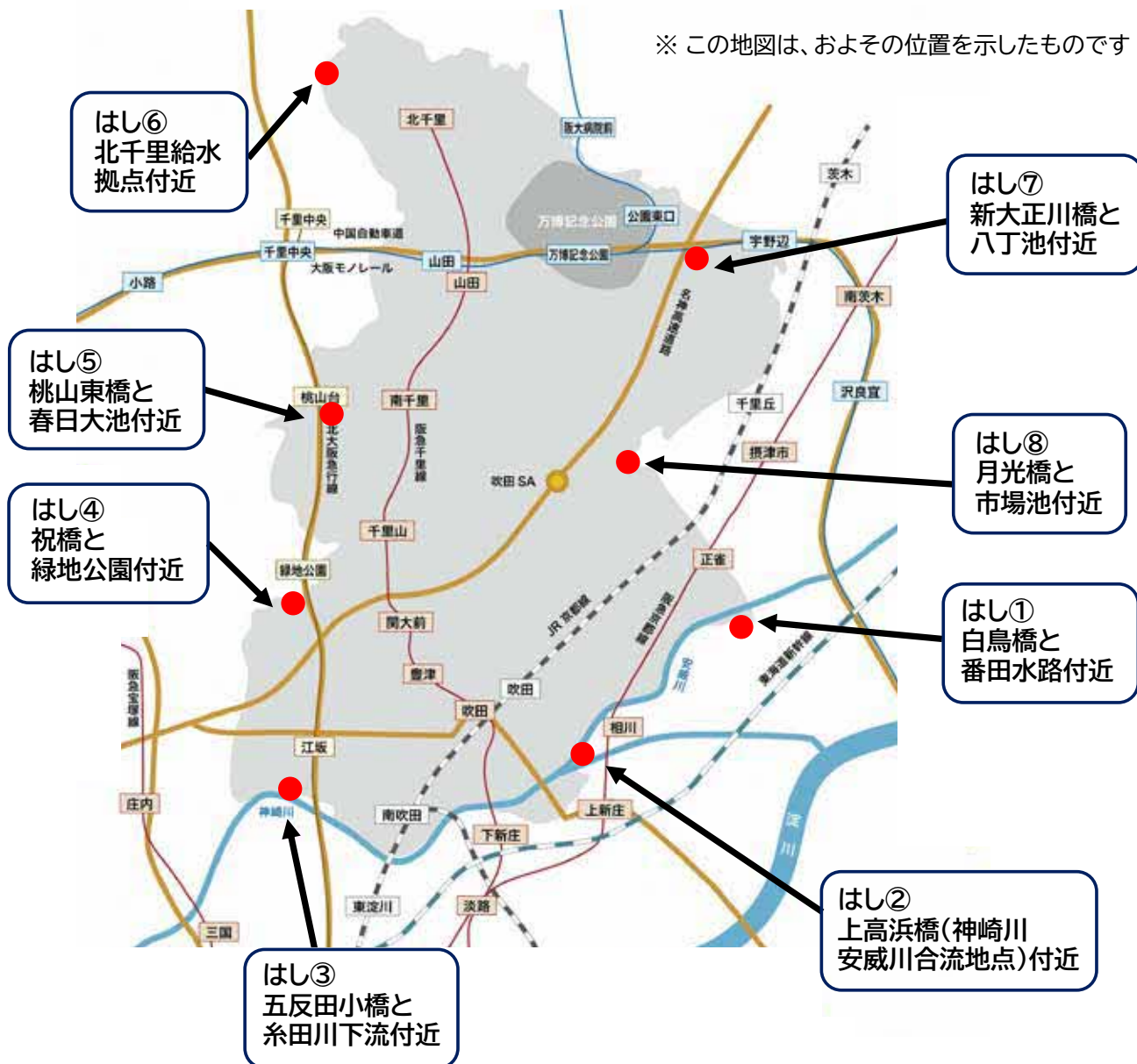
写真8. 市場池とユリカモメ

境界は出会いと交流の場ですが、時には混乱の場にもなります。視野を広げると様々な境界があります。地球のプレート境界付近にたまった歪みは、大地震の要因になります。中生代と新生代の境界（K-Pg境界）の地層には、イリジウムが多く含まれるなどの特徴があり、鳥類を除く恐竜たちなど、大量の生物種の絶滅に至る大きな要因となった巨大隕石衝突の証拠とされています。

この先も吹田や周辺の街で、四季の移ろいを感じる機会が多くあればと思います。一方で、世界中で加速する気候変動とその影響、生物多様性の急激な喪失、今、私たちは重要な境界にいるのでは…、山の端の夕陽を眺めながら、そんなことを考えています。

（夏季展示実行委員 内田陽造）

※ この地図は、およその位置を示したものです



河川の水生生物調査から見えてきたもの

私たち、吹田まちなか水族館のグループは、2年前から近隣の自然関連の団体と共同して、吹田市内や周辺を流れる河川で水生生物の調査を実施しています。

調査のきっかけは、吹田市環境フェスタでした。多くの団体が、環境についての取り組みを報告していました。その中で、いくつかの団体は希少植物や昆虫類など生物の調査報告を展示してあったのですが、吹田市内に生息している水生生物の発表はありませんでした。そこで私たちは、直接河川に入って、タモ網やモンドリなどを使用して水生生物を捕獲し、目視による調査が必要であると感じ実施することにしました。

メンバーの多くは、今まで個人的に河川に入って魚類などを捕獲することは経験していましたが、本格的な調査を定期的には実施することは初めてでした。これまで何度も実施してきた捕獲するだけの観察会ではなく、調査の結果を蓄積していくことが大切だと考え、月一回のペースでの調査を始めました。定期的に調査を進めていくといくつか見えてくるものがありました。最初に驚いたことは、ボラやハゼ類のような海で生息している魚類が確認できたことでした。これらの魚は、海でも河口に近い汽水域に生息している魚で河川下流に遡上することは知られていましたが、吹田市の河川は、最短でも大阪湾まで15kmもあり、海の影響は無いと考えていたので大変な驚きでした。その後の調査では、さらに数km上流でも捕獲出来たことから大阪平野の中央部付近まで海の影響があることがわかりました。

次に確認できたことは、季節により河川に生息する生物たちにかかなりの違いがあることでした。春は、淡水性の魚類ではコイやフ

ナ、回遊性の魚類ではボラやハゼ類、甲殻類ではモクズガニを確認することが出来ました。しかし、4月～5月にかけては成体ではなく、ほとんどが幼体（稚魚）でした。春先に孵化したものが河川を遡上したものだと考えられます。

夏には水温も上がり、春より多くの生物を捕獲し観察することが出来ました。稚魚が多かったフナやコイも成長した物が多くなりました。回遊性のボラやハゼ類もさらに成長していました。魚種も豊富になり、カマツカやドジョウなど底生性のものからオイカワやタモロコのような遊泳性の魚類まで生息状況の異なる種類を捕獲することができました。吹田市付近の河川は思った以上に多様性の高い水域であることがわかりました。

秋になると水温は低下し、捕獲される生物は減りました。それでもフナやドジョウなど通年を通して観察できる魚類は捕獲できました。特にヌマエビは、冬でも捕獲することができる、1年を通して生息している生物であり、魚類をはじめ多くの生物の食糧になっていることがよくわかりました。

吹田市の南を川幅の広い神崎川が流れていますが、市内を流れている河川は狭く、また他市の河川数と比べそんなに多くはありません。そのためか、私たちは日頃から吹田の河川を上から時々眺めるだけで、水深が浅いような水辺には生物が生息していないように決めつけて見ているようです。しかし、よく観察してみると、両側をビルでかこまれているような吹田の小さな川にも周辺の自然豊かな市町村にも負けない程の水生生物が生息しているのがわかりました。

『すいたの自然2021』（吹田市環境部環境政策室、2022年）の中の環境DNA解析に

よる調査結果では、吹田の池や河川に約30種ほどの魚類が生息していることが報告されています。しかしながら、この調査は魚類から出たDNAを調べ、その生存の可能性を確認するもので現認した結果とは言えません。それに対して現在、私たちの行っている調査



4月に糸田川河口で捕獲したボラの稚魚

では、目視して写真に記録した魚は20種ほどに達しています。まだ確認できていない魚種はありますが、さらに調査を続け、吹田に生息している魚類や水生生物を確認し記録していきたいと思っています。

(夏季展示実行委員 奥山佳一)



4月に糸田川河口で捕獲したハゼ類の稚魚



8月に大正川で捕獲したボラの若魚



9月に大正川で捕獲したオイカワの成魚

「生物多様性」はなぜ大切？

「生物多様性」とは、約40億年かけて地球上に多くの種類の生き物たちが生まれそれぞれに適した環境で進化しお互いに豊かな個性でつながりあって暮らしていることを表しています。約175万種の既知の生き物が存在していますが、未知のものを含めると300万種から1億1100万種の生き物たちがいるといわれています。

最もよく知られているのが動植物や微生物など多様な生き物がいる「種の多様性」、もう一つは同じ種であっても異なる遺伝子に

よって特徴に差異が生じる「遺伝子の多様性」、さらに生き物が暮らす環境や周りの生き物とのつながり方が多様である「生態系の多様性」で、この3つの側面について考えることがとても大切です。

生物多様性の大切さについて、わが国の生物多様性基本法（2008年6月公布）の前文の一部には次のように簡潔にまとめられています。「人類は、生物の多様性のもとに恵沢^{けいたく}を享受^{きやうじゆ}することにより生存しており、生物の多様性は人類の存続の基盤となってい

る。また、生物の多様性は地域における固有の財産として地域独自の文化の多様性をも支えている。」と述べています（ルビは筆者による）。

しかしながら現在、野生生物の絶滅が加速し自然界のバランスが崩れつつあります。日本に生息する野生生物・海洋生物の種の絶滅の現状を知る手がかりとなる「レッドリスト」で絶滅危惧種は3,772種と報告されています。また世界では1年間に40,000種もの生き物が絶滅しているといわれ、そのスピードは加速し続けています。

直接的な原因として、気候変動による気温の上昇、開発や森林伐採など生息環境の変化、生物資源の過剰な利用、化学物質などによる環境汚染、外来種の侵入などが指摘されています。

これらは私たち人間のさまざまな活動が自然環境に大きな影響を及ぼしているのも事実です。そのことにより私たち人間と生物多様性の関わりとして、日常生活に必要な食べ物や物資、医療など生物が多様だからこそ得られる自然の恵が失われることになり経済や政治も含め人間社会全体が大きなダメージを受けてしまうことになります。生物多様性をないがしろにすることは私たちの暮らしをないがしろにすることにつながります。

これからの「未来を決する10年」の喫緊の課題は「気候変動の加速」と「生物の多様性の損失」です。このため2030年までに生物多様性の損失を食い止め回復させる「ネイチャーポジティブ」というゴールに向け、国土の30%以上の自然環境エリアを健全な生態系として効果的に保全しようとする目標「30by30（サーティ・バイ・サーティ）」が設定されました。

持続可能な開発目標であるSDGsにおい

ても生物多様性へのより具体的な目標が設定されています。

それは目標14.「海の豊かさを守ろう」と目標15.「陸の豊かさを守ろう」です。これらの目標の達成には国、地方自治体、企業、団体、個人などが連携して取り組む必要があります。

さて、今年の夏季展示のテーマ、「さがしてみよう！ すいたの四季」を見られて皆さんはどのような感想をもたれましたか？皆さんも生物多様性を自分自身の問題として捉えることが大切で、例えば身近な地産地消を通じて郷土愛を育んだ生物多様性について考えてみるのもいいのではないのでしょうか。

自分たちの周りの自然を大切にすることで生物多様性を守る手助けができます。近くの公園や川や山や海に行って自然にふれあいいろいろな生き物を観察してみましょう。その自然の素晴らしさを家族や友達と共有することで生物多様性の大切さを伝えることができるのではないかと思います。

Think Globally, Act Locally の考え方で身近なことから一緒に始めましょう！

（夏季展示実行委員 西尾 昌）



出典：環境省生物多様性ウェブサイト「生物多様性広報パネル」